

読書通信



No. 118

① 日本人（筆者を含む）の悪い癖は悪法に反対している間はともかく、いったん法律が成立するとついつい関心を失いがちなことだ。個人情報保護法しかり、特定秘密保護法しかり、である。後者は施行準備が着々と国民の目を逃れる形で進んでいるが、チェックするチャンスも残されていることを銘記したい。

そのための格好の手掛かりが久保亨・瀬畑源『**国家と秘密**—隠される公文書』（集英社新書、777円）である。政治と行政が何をどう進めたかを国民が知ろうとすれば情報公開、公文書

開示を要求していくしかないが、政治家も官僚も情報を自分たちで握ることが権力の最大の要諦であることを熟知しているので、あの手この手で秘匿しようとする。本書は、公文書がいかに軽んぜられてきたか、国民としてどう対応していくべきか、さらに秘密保護法の決定的な重要性についても論じている。欧米どころか台湾、香港、韓国と比べてさえ日本の公文書管理体制があまりに貧弱なことを知って愕然とした。

② 集団的自衛権は総選挙の焦点の一つであり、野党は日本が戦争に巻き込まれる可能性が増したと批判している。ところが佐藤優『**創価学会と平和主義**』（朝日新書、820円）によると、公明党は自民党に押し切られたのではなくて、むしろ安倍首相や外務省タカ派の暴走に歯止め、絶賛、感嘆、感動で埋まっている。街の清潔さ、人びとの誠意やまじめさ、サービス精神その他、日本人の気づかない長所が次々に挙げられる。日本も増長せずにもっともっと改善し、もっと多くの中国人観光客を迎え入れれば、日中関係は劇的に改善していくだろう。

をかけて、有名無実化したのだという。安倍首相は集団的自衛権という「名」を取ることで祖父のトラウマを乗り越えたと思っただけらしい。本書は創価学会と公明党の歴史に詳細に踏み込むことでその体質を明らかにするとともに、ナシヨナリズムから最も遠い政党、さらに中道左派という日本の政界にぽっかり空いた穴を埋める政党としての公明党に大きな期待を寄せている。創価学会のDNAと特質を知る上でも大いに参考になる。

③ 嫌中論ばかり読んでいても狭量になるばかりだ。世間が思っているほど中国人がみな日本嫌いというわけでもない。Record China 監修『**中国が愛する国、ニッポン**』（竹書房、1058円）はネット上に現れた中国人の訪日印象記

④ 中垣俊之『**粘菌**』（文春新書、788円）はイグ・ノーベル賞を受賞した学者による破天荒な研究の実態と、学問の面白さを味わえる良書である。まず授賞式の紹介がユーモアたっぷりである。日本の学者もたいしたものだと感服し、研究では粘菌が描いた北海道や関東圏の鉄道地図に圧倒された。リベラルアーツ系の読書もいものだ。粘菌というど南方熊楠くらいしか思い浮かばなかったのがだいぶ利口になった。（純）